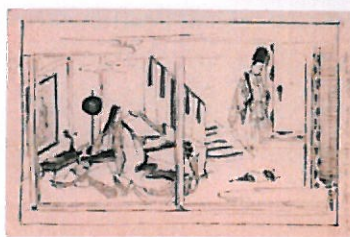


さし絵原画展

文芸雑誌『苦楽』



大阪に六年間だけ存在していた幻の出版社「プラトン社」。
プラトン社発行の雑誌『苦楽』で使われていた挿絵の原画が、この大阪で見つかった。東日本大震災からの一日も早い復興を願う今、関東大震災の影響を受けた文学の世界、またそれを受け入れたこの大阪に想いを馳せてみてはいかがだろうか。



日時
平成 23 年 7 月 2 日(土)~7 月 3 日(日)
午前 10 時~午後 5 時

場所
関西大学リサーチアトリエ
大阪市北区天神橋 3-3-9 天神橋筋商店街
(最寄り駅:JR天満駅から徒歩 5 分、地下鉄堺筋線扇町駅から徒歩 3 分、南森町駅から徒歩 5 分)

大阪市北区在住、横尾茂氏所有。
プラトン社発行雑誌『苦楽』の挿絵原画展示約八十点

プラトン社と大阪

『プラトン社』。大正十一年(1922)に登場し、昭和三年(1928)に出版事業を撤退するまでの六年間、戦前の大阪に彗星のように現れた出版会社である。執筆者には、泉鏡花、大佛次郎、谷崎潤一郎、武者小路実篤、与謝野晶子ら、非常勤編集者に藤澤清造がいた。山六郎、山名文夫、岩田専太郎らを起用した華麗なデザインは一世を風靡し、いわゆる大正モダンイズム、阪神間モダンイズムの勃興に多大な影響を与えたとされている。

化粧品会社の中山太陽堂を後ろ盾にし、女性を読者層にねらった文芸誌として大正十一年五月に『女性』、大正十四年十二月に『苦楽』の二誌を創刊。社長は中山豊三、副社長はその義弟の河中作造であった。戦前の文壇を席巻した『女性』『苦楽』を生んだのは、豊三が発揮したタナマチ精神だったといわれている。

プラトン社発足の二年目、関東大震災が起こる。東京の文士たちが大量に大阪に流れ込んでくると、豊三はタナマチ精神を発揮し、莫大なお金をつぎ込んで彼らの作品を買い、生活の面倒を見た。この頃、直木三十五や川口松太郎が編集部に入ってくる。まさに大阪は日本文壇の中心になっていた。しかし、東京の復興が急速に進むと、多くの文士は東京に戻り大手出版社が大部数の大衆向け雑誌を刊行し始める。プラトン社の経営は次第に苦しくなり、出版活動を停止。豊三の再興に対する動きもむなしく、その願いは叶わなかった。